

---

# 逃亡

柳岸カモ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

逃亡

### 【Nコード】

N9841B

### 【作者名】

柳岸力モ

### 【あらすじ】

逃げる。逃げる。ただ、逃げて逃げて・・・逃げるのだ。

## 序

駅前南口。

閑散とした路地を通りぬけると、噴水をぐるりと囲むロータリーに出る。

石を敷き詰めたようなコンクリート。足元の白黒の石は削り取られたダルメシアンの毛肌。その感触を靴の裏で確かめる。ぼこぼこだ。

撫でるのは、どうしたって足がそうしたいから。そう感じるのは、きつとここが痛いからだ。ぎゅつと胸元を掴む。

…艶があるのは健康な証拠。でも歳には勝てないわよね…。飼っていた犬のドンが死んだ時、母さんが言った言葉。今思い出したのはたぶんわざとだ。本当に足元にあるのは花崗岩。右足は白、左足は黒のところ。肩幅に開いた足。ここがあたしのあるべきところ。立ち止まって佇んで、ふつと顔をあげる。空は、憎いくらいに青い。そして濁ったあたしの目を熱く焼く。白だ。青は透明になって消える。

まだ晴れそうにない、何かにつぶされそうである。雨の中で鈍く鳴く蛙が、喉を膨らませる、その声は、どうだっていい。雨音に掻き消されるだけだ。きつとあたしの声はそんなもの。首だけ後ろをむいて、細めた目で見つめる。

やっぱ、行こっかな。

そう決めるのになんかかかってしまった。でもそんなことも、きつと後から考えればたいしたことじゃない。すぐ忘れる。でも今、こ

の一瞬はどうしたって落ち込む。いつも繰り返す、ちょっとした後悔とくだらない悩み。なんの教訓も与えてはくれないこと。わかっている。知っている。でも、もしかしたらいつか思い出すかもしれない。記憶の断片はいつだって、予想もしないときに現れる。昔食べたお好み焼きの味。夜店ではぐれて泣きそうになりながら歩いたこと。夏休み、ワケも無く溢れた涙。そして、そんなことが通り過ぎた後は、必ずといつていいほど気持ち晴れる。どんな悲しいことだって、過去のことは案外素敵に感じるものだ。たいがいのは、だけど。

今日もきつと殴られる。わかつてはいるけれど、やっぱり、あそこの前を通らないと今日も乗り切れそうにない。そう思った。

店のある通りへ行くのには二つの方法があつて、一つはこのまま目の前の階段を登って行く、もう一つは遠回りをして反対の階段を使う、という方法。あたしは必ずここで立ち止まる。迷うからだ。あそこまでの道。こつちを通れば、そこではきつと高校生とすれ違ひだろう。たくさんの人がいる。でもあつちには花屋もあるし、キオスクもある。ちよつと考えてみる。今からあたしはキオスクでパンを買う。もしかしたら、自販機でお茶も買つかもしれない。これが決まっていることで、決まっていけないのは、これからあたしがどの道でそこに行くかということと、あたしが学校に行くのか行かないか、ということ。

決めた。やっぱり遠回りして北口から行こう。今日はこつちから行く嫌なことが起こりそうな気がする。それは階段で起こるかもしれないし、ホームで起こるかもしれないし、電車の中で起こるかもしれない。想像すると背筋から腰にかけて力が抜けていく。でもそれもたぶん、怖いのは違ひ。いつか思い出す日がきたら、その時はきつと笑える、悲しい思い出。うつむいて、ひたすら歩く。背中を丸めて、足先だけを見て。

店の並ぶ通り。ここからはホームに続く階段に直結している。じわじわと人の気配を感じて、溜息をつく。幸福みたいなものが失われていく感覚。でもきつと、幸福はなくならないものだ。だってそんなもの、はじめからないから。でも、結局は同じことなのかもしれない。なくなることに、最初からないこと。同じ、かもしれない。でも、違っただろうな、本当は。

キオスクの前。パンを買いたい気持ちと、並んで買うための、ちょっとした勇気での葛藤。人がいる。どうしよう。立ち止まって、ちらちらキオスクのおばさんを見る。

「いらつしゃい、はい、これ、百十円」

パンを手渡してくれるおばさんの目を見ずに、とことこと歩み寄ってパンを受け取る。いつも同じのを買うから、覚えてくれているらしい。

「どうも」

交換に百十円を渡す。その時出た「どうも」の低さはちょっと気持ち悪いくらいで、おばさんは少しぎょっとしていた。こっちを見た視線を感じた。でも実際はどうだったかはつきりしない。わたした硬貨は、ずっと手に握っていたせいで湿っぽくなっていた。そう感じたのは私だけで、おばさんの乾燥してひび割れた手では、そんなことに気付かなかったかもしれない。おばさんが笑顔でよくわからないことを言ったので、それに答えるように軽く会釈する。笑っておけば全てうまくいく。そしてまた頭を下げ、逃げるように歩きます。さっきまでの葛藤と緊張は消えていく。でも、きつと明日もあたしは、同じことをうじうじ考えているはずだ。

「コーヒークリームサンド、下さい」の一言がいえない。いや、それは「これ下さい」でも「これ」でも、きつと構わない、そんな簡

単な一言。あたしは、その一言を明るく言う自分のいる世界に、行けずにいる。そこに行くための扉は、きっと小さすぎて、あたしの身長じゃあ、無理。通れない。

最後の店。駅の改札に一番遠い、この小さな店。この先に行っても、何も無い。抜ければホームレスのたまり場で、鳩と出会えるはずで、そいつらは他人なのだ。あたしにとって、人も鳩も同じ。同じように目を合わせないように通り過ぎる。そんなことはさておいて、あたしは喫茶ドルフィンのガラス窓の前に立って、中を覗く。今日も満員だ。

店の前のベンチに腰掛ける。ガラスの扉に自分が写っている。

…鏡みたい。

膝まであげた両足の靴下の位置を確認して、脚を組む。目の前のガラスの奥には、自分と同じ制服の女の子達の背中が、透き通って見える。カウンターに座った女子高生達。じっと睨みながら、さっき買ったパンをかじる。クリームの挟まった二枚の食パン。不自然に柔らかい、お気に入りの味。柔らかいパンが好き。そういえば、昔誰かが言っていた。これも母さんだったっけ？

Y崎のパンは防腐剤が入っているから、腐らないし硬くならないし、皮も張らないの。でも、それはね、身体の中で消化されないものが混ざっているってことでね、

その得意気な言葉には何の価値も意味もない。ただあたしは柔らかいパンが好きで、それがどんなにおかしなものでも、どんなに身体に悪くてもあたしは食べるし、嫌だとは思わないってことで、つまり万事そいうことだ。それくらい簡単に、自分のことも割りきれたらきつと、あたしはこんなにはなつてなかつたはず。あたしは何か割り切れずに、ふわふわしている。ただ、じっとしていられないだけなのかもしれないけれど。

もちろんパンに針が入っているとかだったら、絶対食べない。そこが問題なんだ。わからない、だから何かする。そんな単純な行動。構造。でも、いつか大人って呼ばれるようになったら、あたしは針が入っているかどうか分からないパンでも、決死の覚悟で食べる日もあるだろうし、何のためらいもなくクズカゴに投げ入れるようにもなるだろう。そういう人が溢れている。それが偉いようにも思うし、すごく惨めな人にも見える。

脚を組みかえる。あたしの脚は毛が少ない。そこは、ちょっとだけ自慢できるところなのかもしれない。

あ、自販機でお茶買うの忘れた。思ってみたけど、そんなのはもうどうでもいい。今、とりあえず安心して食べられるパンがあればそれで平気。将来、防腐剤の影響でトチ狂っていたって、今はパンがあれば十分だから、先のことは無視していいだろうし、とりあえず今悲しい気持ちを埋めることができればそれでいい。そのためのパンなんだ。はくつと食いちぎる。むしゃむしゃ、かみ締めながら考える。そうだ、あの日もパン食べてたな…なんであんなこと言っちゃったんだっけ。自己嫌悪。最悪、自分、消えちゃえ…いちいちそんな事気にしている自分が情けない。でも、仕方ないじゃん。気になるんだもん、あれだけ叱られれば。だって、あれは人格まで否定されてるよ、多分。もう、おまえなんて、死ね！ って、そんなレベルじゃん。飲み込んだパンがもどりそうな、胃の不具合を感じる。でも、これだっけと、妄想かなにかの産物。生み出したのはガラスの中のあたし。

昨日、母さんと喧嘩した。ほんの些細なことでもき出した感情。話すのも面倒なくらいのことで、母さんもあたしもあきれくくらい言い合った。たぶん半年は忘れない、母さんの言葉。そしてあたしも

同じふうにもう母さんを傷つけたはず。でもあたしはその一言に反応して、死んだ父さんを探していたりする。父さんだったらこういう時無関心にあたしと母さんを見つめてる。そう、庭で枯れた木を見つめていたみたいに。短大で十分、お前は勉強なんてしなくていい、そう言った時みたいに。

多分、何でもそうだけど、言っちゃったほうも、言われちゃったほうも全部投げ出せたら、楽になれる。そう、苦しみは、忘れるってことが肝心で、それには膨大な時間と、とてつもなく大きな力がいる。

だから、投げ出せない。投げ出した後の苦しみも知っている。逃げたい時はそのことで頭ん中は一杯で、でも逃げ出したら、なんで逃げたって、また頭ん中一杯で。その繰り返し。エンドレス・ソロー。大好きな歌のタイトル。それが、夢の中でさえ、必死になって謝ってたりする。ああ、夢なんだよこれ、ってわかっちゃいるんだけど、でも思い出したくない場面を想像すると、それだけで、いてもたってもいられなくなる。苦しい。息ができない。枕の感触に夢を思っで、やっこのことで目を開けて、確かめて、安心する。汗だけで、それで胸をなで下ろして、大きく呼吸する。どうして人間なんかに生まれたんだろう。こんなに悲しい。これが涙。目が乾燥してひび割れそう。もう何年も泣いてない。でも、悲しいってことはいつだって側にある。そう思った途端、あたしは現実に落ちる。父さんのことも、忘れる。何もかもを科学で解決しようとする。頭はついていかないけれど。

ベンチから腰をあげて、元来た道を歩きだす。ここでこうしてああしていたら良かったな。そんなの考えていたらきりない。さっきより速い足取り。花屋、雑貨屋、キオスク。何も見ない、感じない。あたしには無関係な、塗り物達。さようなら、さようなら、いつてきます。いつてらっしゃい。

改札を抜ける。見慣れた景色に空気。

誰もいない眼下の長い階段にむかって、思い切り唾を吐いた。

空は高く澄んでいる。朝、私にはたくさんやらなければならないことがあって、でもそれが一体、何だかっていうんだ。寝返りを打って、毛布を引き寄せる。さつきから十分おきに目覚ましが呼んでいる。とめて、眠って、また起こされて、またとめて……

目覚ましさえ、あたしの相手に疲れてしまったみたい。ずっと鳴らないでいる。ぼんやりした頭の中でいろんな人の声がする。母さん、父さん、姉貴。

ねえ、あたしね、最近、涙が止まらないんだ。あたし、何か悪い病気かもしれない。

あたし、もうダメだ。

そう思った瞬間、体が宙に浮かんで、消えた。

はっとして目を開くと、容赦ない光の粒が取り込まれて、永遠の宇宙を見せ始める。



偽者、艶のない革靴は、踏み鳴らしても、いい音がしない。トント  
ン、と踵をコンクリートに打ってみる。想像したカッソ、という音  
とは程遠い、パコパコという情けない音がする。気に入らない毎日  
の鬱憤を晴らすように、何度も何度も踵を打つ。リズムはめっちゃく  
ちやだ。泥のついたつまさをみつめて足を動かしていると、頭上  
から聞きなれた音楽が流れだした。その後の電子音。

「間も無く、3番線に、電車がまいります。お待ちのお客様は、黄  
色い線の内側までお下がりください。間も無く、3番線に、電車が  
まいります。」

階段を駆け降りてくる高校生達を見ながら、パンの入っていたビニ  
ール袋をくしゃくしゃにしてポケットに押しこんだ。

あれが私と同じ年の女の子なのか：次々に浮かんでは消える疑問。  
なんの不安もないように見える笑顔。その笑顔の裏には何が隠れて  
いるのか、わからない。なんだ、朝からそんなに話すことがあるの  
か、いや、そんなのは全部嘘なんだ。少なくとも、全てが本当であ  
るはずがない。いや、でも、わからない。憶測で語れない何かがあ  
るように思われてならない。私とは違う、何かが。それが何である  
のか、私にはわかりはしないのか。いや、知ってはならないのか。  
前を通った彼女達の髪の毛の香りが、鼻についた。

長い電車がつながって入ってくる。私の前を通り過ぎ、また通り過ぎ、追い越され、また追い越され、止まった。

ぼやけていた視界が色を持って肩に降りかかってくる。どんつと肩を押されたかと思つた瞬間、私の体は列を組んで並んでいた場所から数メートル弾き出された。その場できゃははは、と歓声が起こる。突然のことに、私はその場に倒れた。バランスを崩したのは一瞬のことだ。視界が点、点、と切れる。目の奥がチカチカしている。

「いた、た」

漏れた自分の声のわざとらしさ。苦笑いをするのはあたしを殺した、あたし。こういうときに咄嗟に笑うのは、たぶん昔からの癖だ。殺されたあたしは、こんな時絶対に泣き出す。そして殺したあたしは、べらぼうに強くなる。

「真中、おまえ、邪魔」

倒れたあたしの前に、クラスメートの押川が近づいて言った。あたしの事を真中、と呼び捨てにするのは押川しかない。ほかのやつらは、あたしを人間として扱っていないから、名前すら呼ばない。そういう点で、押川が唯一、あたしの相手とっていいかもしれない。あの声、あの、変な眉の、背のでかい、足の太い女。毎朝の、挨拶みたいなこの儀式。あたしは、今日も見事、はずれ籤をひいてしまつたらしい。

「おまえさあ、この電車に乗るな、って言ったよなあ？」

そむけていた顔をあげると、太い足が目に入った。いけないとは思いなから、感情は先走つて言葉が出る。

冷静さは欠片もない。こういう時ためらいがないのも、きっと昔からの癖か、何か。

「パンツ、見えてんだけど」

にやけた顔。自分でもわかる。負けたくない。せめて感情だけでも、押川の赤面が、わたしを強くする。膝を押さえながら立ち上がると、今度は平手が飛んできた。

「うっせえ、ごちゃごちゃ言ってるじゃねえよタコ！」  
ばしっ

それでも笑みを浮かべて押川を見る。負けない。今日は負けたくない。ふらふらと別の車両に向かう。逃げなきゃ。逃げ切らないと。負けは認めたくない。

イマドキ、はずれくじだつてポケットティッシュくらいはもらえるんだ。プラスチックの白い玉、それだつて価値がある。価値が無いのは、ポケットティッシュかっていう落胆。そして受け取ったあとに情けなさを感じてしまう、気取ったハアト。押川、お前だつてそうだろう？ あたしなんかを相手に楽しそうに群れるけど、家に帰ったら親と口げんかとかして、部屋で一人泣いたりもして、自分のこと考えたりもするんだろう。そうでなくちゃ、ポケットティッシュはあげられない。あたしの唯一の慈悲、そして抵抗なんだからにやけた顔に力を入れる。歯を食いしばる。甘い、クリームとパンの後味。酸っぱい。顎が痛いくらい。すっかり力の入らない身体に最後の痛みが襲った。タイミングは完璧。わき腹に蹴りの一発。ティッシュひとつに例えるには、ちよつと大きすぎる代償。

歓声。

胃液が逆流した。咽の奥が黄色く染まる感覚。予想はしていた。来ること。だから衝撃も軽はずなんだ。言い聞かせるのは簡単。思い込むまで、何度も何度も言い聞かせてやれば、錯覚を起こしていく。あたしの体なんて、所詮はそんな風に単純に出来上がっている。だからなんとか持ちこたえて、違う車両に向かえる。

まだまだやれる。

毎日こなしていることなんだから、大げさに痛がってみたって自分に嘘をついてるみたいで変だし。とにかくどこでもいい、乗らなく

ぢやならない。なんとか並びなおして乗り込んだ。

扉がゆっくりと閉まる。うつむいた顔を少しだけあげて車内を見渡す。少しだけほっとする。そこは他校の男子達でひしめく、最後尾の車両だった。

空いている席はもちろんない。立っていくしかないな、そう思って壁際にそっと移動した。視線が集まるのを感じながら、私は空想する。

これでいい、これがいい。幸せなんだ  
そう言い聞かせる。

赤く腫れた頬と、擦りむいた膝。わき腹以外は、痛みを感じなかった。これは痛いんじゃない。痛いつてのは、ここがどうしようもなくなる時に使う言葉なんだ。そう思って、左胸のポケットをぎゅっと押さえた。硬いエンブレムがぐにゅと曲がる。それでもやっぱり痛みは感じない。あたしは不感症なのかもしれない。なにも感じない、そんな人間なのかもしれない。それは、良いことなのか、いけないことなのか、わからない。テキストウに生きているからだろうか、いや、自分は可愛い。それに、もしも本当に不感症なら、毎日せつせと生きなくてもいいはずだ。やっぱり何かしら感じているらしい。

それに：学校だって、半分くらいは自分の意思で行っている。というか、他に行くべきところがわからないし、ここでないとところで今とは違う何か。それが何だっつかまわらない、どうせたいしたことじゃないだろうし。をしている自分が想像できない。やっぱり私は毎朝、クラスメートから文句を言われて、叩かれながら、こうして電車に乗って学校に通って、意味もない自分の存在を愛して、客観的に分析して、そうして痛みをやわらげているんだろう。なにもかもつやむやにしてしまえば、私は逃げられる。逃げるのは、得意

だ。

流れる景色を見つめて、あたしはにやにやした。知らない誰かが気  
持ち悪いものを見るような顔で、あたしを指差している。

長い長い授業が始まると、私は瞑想の中、いろいろ考える。

なぜこんなに授業はつまらなくて長いのか、なぜ高校生の女子は足が太いのか、いや細い人はいる、ごくまれに、いや、それはあたしの感じ方のせいなのか、いや、それは…違う、そんなことはない、なんで受験までしてこんな高校に入ったんだっけ？黒板は緑。先生は教師で大人で、労働者。でも先生ってだけで無条件に尊敬されて世間って変。そういえば今日の朝のパン、なんかおいしくなかったな。なんで？ だってクリームが少なかった。甘いのが好きなのに、パンばっかりじゃ、味気ない。酸っぱかったのは、そのせい。そういえばコンビニのパンって添加物が少ないんだっけ？ そこに掛かってるコンビニの袋、リサイクルって書いてあるけど…ふと、隣の席を見ている自分に気付いた。となりの席の机の横に掛かった、ビニールの袋。まるでそこから生えたように投げ出された、二本の白くて細い脚。その先にあるのは踵をつぶした靴と、揃えられた小さなつま先。じつとそれを見て大当たりだと思う。金色の玉が出たような、そんな感じ。ハワイ旅行に、風呂でも見られるテレビまでついてくる。カランカラン、鐘がなる、耳の奥。

カチカチカチ…

微かな音。合成樹皮の擦れる音。組み替えた脚から視線をあげる。ビニールよりさらに上。となりの女の子が、机で隠しながら携帯を

いじくつている手が見える。横からだどハッキリしたものだ。時々が笑顔で、ほとんどが無表情のその子の横顔を眺めながら、あたしはやっぱり何もせずにいる。ぼんやりと、ただ何もできずにいる。その子のエンブレムの刺繍が、日の光を受けてきらつと光った。きれいだな。あたしの刺繍は、曲がって錆びて、泣いているのに。どうして錆びた？ あ、そっか、握りすぎたせいかな。半分でくつきり曲がった自分の胸元のそれを見る。何も入っていないポケットと、への字に曲がった、かわいそうな、高級品。これは違反かもしれないぞ、ふつとそう思った。隣からは相変わらず、カチカチカチカチが聞こえる。教室は午後のまどろみの中、ぬるい空気が充満しているから、眠たくなるのは当然だ。酸素が薄い。時々どこからともなく大きな溜息が漏れる。「早く終われ」「時間、早く進め」そんな抗議みたいな、長い吐息だと思うと、ちよつとエツチだ。

相変わらず、隣は真剣に機械と向き合っている。相手は今どこにいるんだろう？ もしかしてこの教室の中にいる？ それとも地球の裏側？

髪に手をかけて、微かに彼女が笑った。それは、小さい画面の中の文字に向けられた軽蔑なのか、つながっている相手に対する微笑なのか。おかまいなしの授業は進み、緑板は白の記号で埋まっていく。そんなのも全部、網膜に映し出された一枚のフィルム。でも、この子はそんなのに無頓着。機械でのやりとりに没頭していられるんだから。

（なんでそんなに楽しそうなんですか？）

そんな疑問が湧き起こるのは、あたしが、受け入れられない感覚を必死にかき集めているから。あたしが、生きているってことだから。

「真中さん」

指名されたのは、あたしのよそ見がばれたからじゃない。あたしの出席番号が、日付と重なったから。それだけの理由で、あたしは教

師で労働者のあの人と目を合わせる。でも、次の一秒で躊躇うことなくうつむく。そして、空想する。

労働者がめくじら立てて叫ぶ。あたしに働けっていうの？そんなのお断り。こっち（の親）は金払って来てやってんのよ。もうちょっと配慮しろ、このタコ。

あたしは押川にやられたように労働者を突き飛ばし、頬をひっぱたいて、わき腹を思い切り蹴った。蹴ったほうの足は鉄のパイプみたいに硬くて冷たい。凍ったみたい。敏感に温度で解かされる。

ついでに顎を蹴り上げ、髪までむしりとってやった。荒い息。満足した顔。でも、そんなことだっけいつかきつと、いい思い出になるのね。悲しいはずなのに笑いが止まらない。悲しいのは、たぶん嬉しいからだ。不幸なのは、幸せだから。いいことは、悪いことがあるから成立していく。一等賞はね、ビリがいるから褒められる……

そんな空想に飽きれば窓を見る。教室はしんとして私の発言を待っている。なめらかな午後の時間の、ピリツともしない空間に、あたしの存在みつからない。どれだけ手を広げても、ここにいるのはあたしではない、何か。だから答えることは無い。でも、これは正しいやりかたじゃない、そのことは理解している。でも答えることだつて、正しいはずはない。たとえ答えが分かっていたって。

シエリル・クロウの曲。突然にして必然に流れ出す。めちやくちゃの英語で覚えた歌詞。大声で叫びたくなる。

それで幸せになれるんだったら

そんなに悪いことでもないんじゃない？

それで幸せになれるっていうのに

いったいどうしてそんなに悲しいの？

気付けば空はいつも青くて、鳥が飛ぶのは当たり前前みただけれど、

でも

「真中さん」

もしかしたら鳥だって、あたしと同じ、嫌嫌ながら生きて、不感症を気取ってるだけなのかもしれない。ねえ、あたしもっと、違う空間で生きていたんだけどな。はばたきながら、そう叫ぶ鳥。私も、そう思うよ。さっきから聞こえる声、これも、たぶん異空間からの呼び声なの。耳を傾ける必要は、ないんだ、きっと。

「じゃあ、次の人。」

ほら、こうやって、じっと身を硬くしていたら、全ては通り過ぎていくじゃないか。嫌なことも、忘れたいことも、どうでもいいことになった。だからあたしは、大切かもしれないことも全部、通りいっぺん、全部流す。掴みたくないものまで嫌な思いして掴むくらいなら、あたしは全部知らないほうがいい。

隣のビニール袋が揺れる。

携帯をいじっていた隣の女の子があたった。それは携帯をいじつたことがばれたからじゃない。ただあたしの隣だった、それだけの理由。携帯を折って握りしめたまま答えようとしている。それをうつむき加減で見ている、あたし。

「どこですか？」

次の一瞬でその子が教室の中に戻ってきたのを感じる。存在も、必要性も、彼女の意思も、感覚も、一つひとつが集まってくる。放射状に集まる光線みたいなもの達。色がある。綺麗だ。見とれてしまふ。そこに人の息や、教師の思っていることが溶け合っていく。ねえ、どうして、そんなに綺麗でいられるの。

「聞いてなかったのか？」

労働者は教師らしく、より人間らしくなる。

「はい、すいません、あはは」

コンビニの袋がまた揺れる。かさかさした音が響いて、あたしの耳をくすぐる。

その子はどこにだつて居場所を作り出せる。住む世界が違う。これは、うらやましいんじゃない。もっと、別の感情。手も、足も出ない、そんな敗北感、疎外感。それは全部自分が作り出した幻想。でも、この心の中の暗雲は何？ 朝のわき腹の痛み、それさえ吹き飛ばすくらいの、この痛み。異空間からの使者は、もういない。見えない。

はっ、と我に帰ると授業はとっくの昔に終わっていたように、教室に酸素が満ちていた。

やっぱり私はひとり、ホームに立っている。よく晴れているのは知っている。けれど、私は一人、今日もうつつむいている。首が顔より黒いのは、いつもうつむいているからだ。これが私のスタイルなのか、何なのか、母はいつも、姿勢が悪いと言い、それが父に似ている、また父が叱られて、私と父と、がつくりしながら食事する。そんな十七年を過ごしてきた。ホームに立つ。

食卓、静かな台所。食器のすれる音。かちやかちや、箸。かきこむご飯。薄い味付けのおかず。青色のテーブルクロス。みそ汁でながしこむ。嫌な空気から、この場所から、一刻も早く、逃げたい。そんな気持ちで居た子供のころ。ねえ、母さん、あたし、だから今も、

ご飯食べるのはやいよ、すんごく。ねえ、父さん、あたし、今も昔  
のまんま、背中丸めて立ってるよ。逃げながら、立ってるよ。

「真中さん」

わたしが教室という空間で生きられない人間だということを知って  
か知らずか、声をかけてくる子がいる。「真中さん、次の授業、美  
術だよね？」

やれやれ、こういう、何も知らずに関わろうとする人間が1番厄  
介で、流す、の部類に一番しっくりくる。

「選択授業、美術じゃなかったっけ？」

「そうだけど」

その子の質問に答えることは簡単だ。しかし厄介なのが、その後  
も会話が続行することであって

「よかったあ。一緒に行ってもいい？」

やっぱり。

予想はしていた。この、名も知らないクラスメイトが昨日、グルー  
プから弾き出されたということ。それが原因で、彼女は孤立したこ  
と。そして、真中という、クラスの中でも浮いた 今のこの子に  
言わせるところの同類（これはあたしの主観）、他のクラスメイト  
から言わせるところの余り物（これはあたしの客観で多分正解）の

存在に目をつけたこと。こういうことは、まあよくあることで、  
飽き飽きしているくらいだ。ようは、自分が一人でいることが嫌な

んだらう。誰だってそうだ。ただ、それをこらえる気力があるか、ないかは個人差があつて、個人ていうのは交ざり合つているから強調されてくるのであつて、人間関係は、だから面倒なんだ。

「一緒に行こうよ。」

あくまで好意的に明るく振舞うこの子を、さらに傷つけたくはなかつた。目の下にはだただけどクマがあるようだし、髪はもつさりまとまつていない。たぶん昨日は眠れない夜だったんだらう。きつと家族には言つてない。当たり前だ。この子はまだ希望を捨てていなかったんだらうな。今日の、この休み時間までは。そんな空想を巡らすと、なんだか自分のことみたく思えて気の毒にはなる。でも私にこの子と仲良くする必要があるだらうか。私はごめんだ。そんなに一人が嫌なら、学校なんて来なければいい。一人が嫌で、それでも学校に来なければならぬ、そういう葛藤があるうちは、一人で静かに考えたほうがいい。そう、私はいつだってそうしている。

私とつるみたい？ まさか。お断りだと、はつきり言うべきか。

また、私はトリップする。空間と空間を移動すれば世界は万華鏡になる。黒、白、緑、赤、橙、色達は発光して一瞬でキラリと透明になる。そして世界は失つた色を取り戻すべく動き出す。侵食する色。世界が肩にかかれば、夢みたいに切れ切れのラジオの音を持つ。見える。手もあたたかい。これは、あのとき、こうしていたらあなつて自分の住む世界。綺麗。こんな世界、みたこともない。最良の決断、格好良く、うまくやれている自分、樂しげな生活。親友というべき人物に出会う、生涯その人と仲良く支え、支えられながら生きる、そんな空間世界。もんもんとなにかに打ち込んで、今よりもさらに他者との交流を断っている自分のいる空間。

音は流れて消えるのに、色はいつまでも消えようとはしない。あたしの存在なんて消えてしまつていいのに！ どうして、どうして逃げられないの、ここから。

すうつと鼻から息を吸う。

「ごめん、私、一人でいく。」

どんな決断を下したって、生きていける。生きていかなくちゃ。どんな結果になっても、どんな未来がやってくるかは、その時にならないければわからない。最良なんて、分かってたら誰も間違いないっておかさないし、現に私は今、大きな間違いをおかしたかもしれない。親友となりうるかもしれないこの子の言葉を無視して、私はひとり歩くことにした。立ち上がりながら更に私は自分の未来を切り取った。

「馬鹿にしないでよ。」

切り取るのは、クリック一つでできる。それが簡単なのはきっと時代のせい。あたしのせいじゃない。やがて切り取ったことだって忘れる。痛みまで手離せば、やがては元に戻るような気がするから。

ねえ、編集機能はもうタイムアウトなのかな？

…その後、あの子がどうなったかは、私には関係のないことだ。どうだっていいとか、そんな単純なことじゃないのは分かっている。それでも私の思想の中には、彼女を受け入れる余裕は無かった。そういう決断が、私を形づくる。無神経、偏屈。どれもじっくりはこないけれど…孤独なのは、正解だ。最高級の孤独は、悲しさすらない。惨めなのは最初だけで、なんでもかんでもおかしな方向に持っていくっていい。そうすれば睡魔が押し寄せてくる。押し寄せれば、眠れる。眠れば、孤独も味噌もくそもないんだ。みんな眠れば一人だ。

晴れた日。私はまたホームに立っている。自分のこと、未来のことなど、もうどうだっていい、考えるのさえ疲れた。

放心状態で、口を空けて間抜けに立っている。授業で時間を埋めてとりあえずは生きた証を立てた。今日はもう死んでしまっただけいいはずだ。肩にかかる鞆の重みは、きつとあたしの命より重い。あたしには、経験もないし、学力もない。間違いを正す勇気もなければ、自分を毒入りパンに例えることもできない。ふつと溜息が漏れた。疲れた。

自販機に、大きな蛾がとまっている。斑点と、白い4枚の羽。その姿は虫というより一枚の絵画。青いタイルの上に止まった、立体絵画。さらさらと音をたてて砂のように崩れてしまいそう。

(風、吹くな)

心の中の叫びが外にも聞こえてしまったように思っ、周りを見る。誰もかれもうつむいている。まるであたしがたくさん溢れてしまっただけみたい。

最近、あたしが一杯で困る。みんな孤独で死んでいる。みんな生きるのが下手なせいだ。うつむいて、必死に自分の存在を消しているんだろうか。それとも自分なんてそもそもいないんだろうか。

次の電車の到着は、まだである。

「真中じゃん。」

後を振り向くと、押川が立っていた。

「お前さあ」

押川は何か言いかけて黙った。私はなるべく目を見ないようにする。困ったことに、あたしは今完全に無防備だ。なにも準備をしていない。

「なんか……いや、やっぱいい」

今はいつも一緒に群れているやつらがいない。そしてあたしも無防備で、つまりお互い様なのかもしれない。焦る頭の回転はマックスで、オーバーヒートしてしまいそう。

「あなさ」

やっぱり何かいいたいようだ。私は殴られてもいいように、身体を硬くして次の言葉を待つ。

「いや、その、いつも、殴ったりしてさ」

顔をあげて、押川を仰ぎ見た。その画面にあったのは笑顔の押川とその曲がった眉。

「ごめんとか、言うと思うか？ タコ」

凍った身体が熱を持って弾かれた。強い拳がまともにみぞおちに入る。予想を超えた。今、あたしは本当に、自分自身、痛みを感じている。痛い、痛い。逃げられない。逃げられないという、恐怖。

「なんか、お前見てると殴りたくなるんだよな。」

どこかの漫画で聞いたことのある台詞だ、と思った。

蛾が飛んでいく。

それは、壊れた絵画。

壊したのは私。

自販機にもたれながら、腹を押さえた。

降参だ。もう、あとは好きにすればいい。

「なんか、言うことは？」

睨まれるのを感じる。けれど、恐怖ではない。これは諦め。

蝶が逃げた。

あたしは逃げ遅れてしまった。

壊れた絵画。

どこにいったの？ 私はなぜ、こんなに苦しんでいるんだっけ。

「……………」

言葉にならない声。口だけがのろのろと動きたがる。

「聞こえない」

押川、お前、なんで

「…なんで、そんなに楽しそうなんですか…」

けらけらと高い笑い声が響く。ホームにいた人達がこっちを見ているような、そんな、気がする。

「さあ？ わかんない。」

私は、これ以上風が吹かないことを祈って、目を閉じた。

平手が何度も何度も襲う。

痛みはない。ぎゅっと身体をかたくしていたら、なんだか眠たくなつた。

また違う世界に行けるような気がする。

日ざしに舞い上がる砂埃。

陽炎と眩暈。

緑と赤。

なぜ、なぜ。

脳は停止しようとする。

乱暴な命令がただそこにいるだけで、

ただ停止するのが時間で、あとは全部同じ。

走れ、速く、走れ！

足は不自然だ。

きつと粘りついた体液にまみれてしまったんだ。

地面にたたき付けた。

砂が口の中で分解される。

なぜ、なぜ。

風一つない。

起こしているのは私の鈍った体。

どうか、どうかこの耳を、目を、肌を、全てをここへ預けさせて。

登るんだ！

命令は、体の奥底からの慟哭。  
荒い息。

なぜ、なぜ、なぜ！

走れ、速く走れば全てがお前を待っている…

もう、だめだ。

目の前の光景。

絶望と呼べないとしたら、  
それはきつと最上の幸福だ。

もう…あたしは失うんだ。

何もかも、全てを爆発させれば救われる。

声は山を割り、

ひとつの命が、今、消えた。

救えなかった命と交換に、

一瞬で、巨大な岩山は轟音と共に碎け散った。

もう二年経つか、父さんが死んでから。

アルバムをめくりながら長い溜息をついた。

死んだ父さんとの思い出は、多い。

それは写真なんかじゃ残しておけない、断片的で細かなもの。

コンビニのマフィン、車のダッシュボードの中のキャラメル、二人で行った、父さんの好きなお店、ホームセンター、休日の園芸屋。

父さんはいつだってへらへら生きていた。いつも何かに疲れていた、何か考えていたり、何か歌っていたり。私は、そういう父さんを何とも思っていないかった。当たり前前にそこにいて、当たり前前にだらだらしていたからだろう。

私は何をしていたって、父さんは何も文句を言わなかった。なぜだろう。今となつては、もう誰にもわからないことだ。

葬式は泣いた。涙はしょっぱくなかった。本当にしょっぱかったのは父さんの頬だ。父さんは泣いていたから。それを見て、私も泣いた。本当は父さんの顔に塗られた死亡化粧がしょっぱかったのかも知れない、と今になって思う。

病院に担ぎ込まれ、息を引き取ったのは午後一時くらい。

カーテンの中で、父さんは静かに固くなっていた。母さんの嗚咽。響いて、胸に突き刺さった。立つことさえできなくなった母さんは、車椅子に座って、開いた瞳孔であたしを見た。

嗚咽。嗚咽。

叫び声。

塞げない耳。

まだ鳴っている。いつ鳴り止むのかはわからない。多分、あたしの頭痛の原因はこれ。キーン、キーン、ゴン、キーン、キーン。左手で耳をそつと塞いでみた。

何度夜を重ねても、癒されない悲しみがある。でも、何度朝を迎えても消えない喜びは、ないのだ。なぜ、父さんが死んだのか。私は目をつむる。

あの時放ったあの言葉。

「今日は、いいや」

それが父さんを追い込んだのでは？そんな気がする。

そして今、あたしは逃げながら生きて、そしてそれでもやがてくる父さんの命日を何度も迎え、過ごし、やがてこの苦しみを抱えたまま死んでいく。私だって、いつまでも逃げているわけではないだろう。いつかは入るべきところに入って、一生を終える。そう考えると、少しは楽になる。

「今、行くよ」

そういう一言が頭をよぎらなかつたといえ、それは嘘になる。なぜあの時のあたしは、その世界へ行けるはずだったのに選ばなかつたのだらう。まだわからない。たぶん、センスがないんだ、今も昔も。咄嗟の判断のセンス、タイミングみたいなのが苦手だ。

際限ない悲しみはあつても、際限ない命はない。私は死にたいんだらうか、それとも、生きたいんだらうか。 私は死にたいんだらうか、それとも、生きたいんだらうか。

おや、ここに落ちているのは死への切符か。私は握り締めて、改札へ向かう。ホームには父さんがいるんだらうか、いないんだらうか。やってみなければわからないだらう。

かつ、かつ、かつ、

「ちょっと、あんた危ない！」

はっと我に帰る。黄色い線を越えた体は、あと少しで電車のスピードにもって行かれるところだった。サラリーマン風の男の人が駆けよつてきて「あぶないよ、あんた。ぼんやりしてちゃ」と真剣な顔で言う。その顔がすごく現実離れしていて、あたしはちょっと笑いそう。

(あたしは死に損ないの、くずだ。死ぬことさえできない。)

大きく溜息をついて2、3歩戻つて、元のように電車を待つ。

「気をつけなよ。」

この人はきつと、あたしに施した善意で明日も生きていけるんだ。そうしみじみ思った。

何の意味もない救い。それは自分から発して、自分にだけ戻ってくる、利己的で幼い感覚に似ている。あたしはその男の背中を見つめて、いつか天罰が下ればいいと願った。

「あの、」

廊下ですれ違った男子に引き止められた。私はうつむいて歩いているから顔は見えない。見ないようにしている。決して顔はあげない。顔をあげて堂々と歩く自分のいる世界は眩しすぎて、きつとあたしは宇宙服でも着ないと生きられない。栄養はチューブか何かから補給する。酸素はボンベから送られてくる。あたしの体は、人工物によって完璧にコントロールされている。

「あのさ、これ」

厚いゴーグルを通して見えたのは、試験の順位表。それを持った男子の手。硬そうな、指。大きな爪。

「真中さん、だよな、あんた」

こくり、と垂れた頭をさらに深く曲げる。ガシャ、ガシャとロボットの動く音がしそう。笑いそう。

「あのさ、これ、いつも見てんだけど」

向き合っていた男子は、私に並んで続けた。

「いつも載ってるよね、名前。」

黄色のラインマーカーで印のついた名前。ゴーグル越しに見える黄色はきつと、地球では赤か、ピンク。なんてね。どれどれ、といった具合に覗き込む。

「すげえよな、ってかき、あんた、いつも1位じゃん。」

瞬間、男子を振り切って私は走りだす。

ついてくるな。

その声はもちろん声にならない。顔が熱い。顔も、身体も、変。宇宙服は重すぎてすぐ脱げない。遅いのはそのせい。

思春期の男子の笑い話みたいだ。エロ本隠しといたのに、母親に見つかった、そんな感じ。しかも読んでた現場を押さえられた、そんな大きなショックと、どうしようもなさ。悲喜劇、ワン・ツー・スリー。

「まーなかさん！ あんた、なんでアルファは受けてないんだよ！」  
男子の声が廊下中に響く。

「まーなーかさーん！」

恥ずかしい。バカ。

あたしは、その男子に何もかも知られた気がして、ただただ、思考を停止させようとする。それでも思考は巡る。くるくるくるくる、次々に起こる思考。回路はショートする。もう、ダメだ。普通に、考えよう。走りながら、ゆっくりとだけど風を感じながら、何処で立ち止まるか考える。ここを曲がったら、とりあえず止まろう。廊下は滑りやすくなっている。

試験の順位表は初めて見た。いつも成績表で順位は知っていけど、あんな風にみんなの目につくところに自分の名前が載っているとは…おちつかない。担任の教師からもよく言われた。数学ができるんだから、何も卑下することはない。ここは進学校。君みたいな生徒

はみんなの刺激になるんだ、と。

あたしは「はい」「はい」「はい」と言いながら空間を移動する。いろんな空間の扉を引いたり押ししたりしながら時間をつぶす。くだらない教師との出会いに、開ける扉はみつきりっこないから、別の扉を必死で探す。うつむいたまま、手の甲をさすりながら。

「アルファも、受けてくれて構わないんだ。他の生徒のことを気にする必要なんてないんだ。」

「はい」

こんなとき、父さんはこう言っと思っ。

「テストなんか、別に受けなくていい。淳は普通でいい。」

この言葉が、あたしを救う。愛は地球を救う。

あたしも父さんも、他人のことを思いやるほど、優しくは絶対ないけれど。

私の中の悪魔が動き出すのは、ベータの試験の時だけ。その時だけ、私は逃げることをさえ忘れる。悪魔がささやくから。

お前が親父を殺したのか！

そうだ、と認めたくない私と認めてしまった私。マールブルに混ざっている。黄色とパープルの渦。飲み込まれないように、かじりついてペンを走らせる。気付けば試験時間は終わっている。真っ黒の解答用紙。達成感とは程遠い感情。あれは逃げた後の、落ち着かない感情。誰かが追ってくる。また、逃げなくちゃいけない。休む暇はない。

でももうへとへとなんだ。

「あ！真中さんだ」  
成績表男子は、あたしを廊下で発見すると、決まって声をかけてくるようになった。最初は無視していた。でもしつこいので無視しても意味が無いことに気付いた。それから、不覚にもあたしはこの男子の前で宇宙服を脱いでしまった。すぐに逃げられるようになるのか、慣れてしまったからなのか。

「今度 俺にすーがく教えてもらえないっすかー」  
靴の踵がつぶれている。  
踏み潰したんだ。  
最低。

そんなかしこまった風もない男子に、何か言いたくなっついで、  
「それは、」  
言ってしまった一言。

「うん、それは？」  
男子の顔が、あたしを覗き込む。背が高い。威嚇されてるみたい。負けないぞ。見ないぞ、うつむく。ゴーグルだけ着けた、へんてくりんな武装。

「ただで？」  
「えっ」  
本当に驚いたように言う。ゴーグルを外して、ふつと顔をあげる。考え込むように顎に手をあてる仕草が、少しわざとらしい。

「いや、ただ、んー、うん、そう。ただで。だってさ、教えるためになるよ？」  
ため…。なんて、テキトウな言葉。どこから出てくるの、そんなの。聞いてやりたくなる。意地悪な、性格。宇宙服はきつと、宇宙の果てで粉々になっている。集めることはもちろん可能だけど。  
「ためになることって、ただなの？」

沈黙、数秒。

なにかおかしいなことを言ったような気がして、訂正しようか考えていると

「そう、うん、たぶん、ただ。だって真中さんにも得になってんだよ?」

男子は爽快に言った。

くそ。ふうん、と言いながら考える。あたしの得。じゃあ、あたしの損は？ 並んで歩く男子の、骨ばった手首を見ている。ふっと浮かんだ計画。

「いいよ。教えてあげる。」  
まじ?」

男子のその声がこびり付いて、引っかき傷みに痛かった。

電車に揺られる。揺られるっていったってたいした揺れはない。さ  
ーっとながれるように走る車両。

「俺、電車とか、久しぶりかも」

さつき名札の名前を見た。西脇。西脇：知らないな。

「ふうん」

そう言いながらも「電車とか」って、ほかにはなんだよとか、「久  
しぶりかも」って、自分のことだるとか考えていた。矛盾してる。  
人のこと言えた義理じゃないけど。

「真中さんて電車通学なんだ」

途切れた会話を埋めるようにして出た言葉。今産まれたのね、テ  
キトウに、考えなしに。でも、今は許すよ、だって、そういう人な  
んでしょ？ 西脇、というこの人は。

「うん」

「どこから？」

「黒沢」

「えっと、黒沢って四つ先だっけ？」

また、そんなおかしなこと言っつて。分かってるんですよ、と言  
いたい気持ちは胃の中に閉じ込める。

「三つさき」

まじでか、と西脇は大げさに言った。カレーを食べ終わった鍋の淵に着いたカレーがぺらつとはがれた時みたいなの、爽快な、まじでか。それには嘘はなさそう。きつと、悲しいってことを知らない、そんなさわやかさ。無知の幸福。

「俺、五つ先からチャリなんだけど」  
「嘘」

本当に驚いた。横を見る。自転車は学校に近い家のやつが乗るもんだろ、と突っ込みたくなる。でもそれも押し込めて。

「何キ口くらい？」

「さあ？」

「わかんないの…」

諦め交じりのラストセンテンス。変な会話。かみ合ってるはずなんだけど、でも何かずれてる。前に向き直り、頭を上げ、窓に映る自分と外の流れる景色をぼんやり眺めた。

ねえ、これがあたしの住んでる世界なんだって。信じられる？  
そう思っただけをむいた。

「うん。いつも同じじゃないし」

センテンスはつながっていた。

「え？」

「毎日違う道で来てるから。雨の日は一番近道だし、暑い日は川沿いので来る」

ふうん、そう。言葉は喉に引っ掛かっている。胃から出てきそうなほど、溢れそうなほど。

「電車、いいね」

「雨の日くらい、電車にすれば」

「考えてみる」

雨の中、傘を盾にして自転車に乗る西脇…

「傘差し、捕まるよ」

「そんなバカな」

「ほんと」

マジの顔で言う。当然でしょう。

「…冗談っしょ？」

「冗談じゃないよ」

西脇はまた大げさに、まじでか、と言った。  
痛い、でも痛い顔はしちゃダメだ。

電車が黒沢に着いて、停まった。

「降り口は左側でございます」

人が流れる。流れに沿って下りる。扉を交差する。歩きながら、ア  
ナウンスの真似をして、小声で

「でございます」

と西脇が歌うように言った。そして上機嫌に鼻歌まじりで、くるく  
るまわりながら歩いている。ちらっと後ろを見て、ああやっぱりこ  
の人なんか変、そう思った。

「どこなの、そこ」

「うえ」

あ、そ、と西脇が言う。あたしと歩いていて平気なのか、この人は  
と、ふと疑問に思った。

「楽しみだなあ」

西脇の一言一言がいちいち気になる。この人の存在は何か、どこか  
変。どこ、とは言えない、そこも変だ。

「別に、普通の喫茶店だよ」

あたしの言葉遣いまで、何か変。

「真中さんさ、」

西脇がぐつとあたしの腕を掴んだ。そして引き寄せられる。ちよう  
ど家まで一キロの、駅のホーム。

「エンブレム、折れてる。さっきから気になってたんだけど」

顔が近すぎて、腕が自分の腕じゃないみたいに固まった。痛い、痛い。何か痛い。

「自分でやった？」

そんな顔してたんだ。目、意外と小さい。そらせない。匂いがする。甘い、ぺこちゃんのアメの匂い？ それとも香水？

「これ、めっちゃ高いの知ってる？」

突然現実を引き戻されるような感覚。

「知って」

ぱっと離れる。

「る」

「大事にしないと、服装検査、引っ掛かるんじゃない？」  
西脇の長い足が、私を追い越していく。

「引っ掛からないよ」

声は自然と、大きく出た。

西脇のただ乗りは無事成功するだろう。ここまできて見つかることはまずない。

「やったね」

うん、そだね、と階段を登りながら言う。長い階段。声が突然響きだす。

「あのさ」あのさー

「うん」うんー

「いや、なんでもない」いやなんでもないー

「なにそれ」

「真中さんてさ」

「俺のこと知ってたあ？」

西脇が、ちよつとだけ期待してるみたいに見える。迷わない。迷った風に見せたほうがいいのか？ いや、素直が一番でしょ。

「知らなかった。今もだけど」

うつむいた、隣の頭。

「やっぱり」

予想は外れて、痛みはなかった。

商店街を並んで歩く。中国雑貨のお店。花屋。生パスタのうまいレストラン。

「ねえ、どこ」

西脇。

「もうちよい」

「何食う？」

「なんでもいいよ」

「俺、金ないかも」

だから、ないかもって何よ、と思いながら

「あたし、あるよ」

とぼそり。

「まじ？」

嬉しそうな西脇に、やられた、と思った。

ねえ、西脇なんていうの？ と心の中で言ってみた。もちろんその声が届くはずはない。

喫茶ドルフィン。何かいいことがあったら、その日入ろうと決めていたお店。キオスクのパンをかじりながらベンチに座って、ここで飲むコーヒーを想像していた。きっと温められたカップが出てくる。いい味なんだろうな、なんて勝手に想像して、にやついて、気味悪い。

「……」

「ああ、ここね」

西脇は無感動に入ってしまった。後ろについて入る。

「いらっしやいませ、何名様……」

マスターの声に応えて西脇はVサインを作った。

「……かしこまりました。奥のお席へどうぞ」

西脇がここ、という席に座った。思った通りの柔らかい空間。椅子。壁。香り。

「何、する？」

西脇がメニューを広げてこちらに向けた。

「……どうしょ」

「真中さんと同じでいいよ、俺」

あたしは鳥肌が出るのを感じた。少しだけ、寒い。あったかいはずなのに、どうしてだろう。

「じゃあ、カフェオレ」

「ん」

西脇がマスターに手を振った。

「ご注文、伺います」

慣れた風なマスターに、慣れた風な西脇。ちらつとあたしを見てから

「カフェオレ、二つ」

と西脇。

「かしこまりました」

『わたしのお気に入り』っていう曲が流れてるのに気付いた。ちょっと伏線強すぎない？ そんな偶然の産物。

西脇は鞆からノートを取り出した。それはベータでもなくアルファでもなく、現代文のノート。ぴらっとめくる。

「これ…」

そこにあつたのは所狭しと書かれた数式、 $\int$ 。書き殴ったそのページに目を奪われる。

「…これ、何」

「俺の数学のノート」

「すごい」

「俺、数学結構、好きなんだ。点は取れないけど」

しばらくそれを見つめて、考える。数式は、 $\int$ は、どれもこれもベータの範囲だ。でも、

「でも、なんで現代文なの」

西脇もしばらく黙って、考え込む。

「…いや、なんか、一生懸命みたいの、嫌いだから。この授業の時間だけ勉強してんの。部活とかあるし。」

西脇は照れているのか、真剣なのかわからない顔で言った。

「俺、真中さんみたいになりたいんだと思うんだけど」

今度は照れているのがわかった。

「いや、なんか、模試は取れる、みたいなさ、そういうの、かつこよくねえ？ 普段は勉強してないけど、みたいなさ」

「みたいな、みたいな、のテンポが速い。この人もしかしたら、

「あたし、数学しか」

思い切って顔をあげて驚いた。そこにあっただのは、西脇の怒ったような顔。

「数学で、いいじゃん。十分」

「でも（あたしいじめられてるし、はぶられてるし、それに）」

「何、」

「努力、してない。だって、数学は勉強するもんじゃないでしょ」

「腹立つこと言うね、あんた」

西脇は何もわかつちやない。あたしが、どんなに根暗で、ひきこもりみたいで、いちいち細かいこと考えて、気にして、そんなのもうどうだっていいけど、とにかく

「でもね、聞いて」

慌てて付け加えるように言う。西脇は怒ったような顔を変えない。完全に、怒らせた。嫌な奴だと思われた。そう悟ったら、悲しくて痛かった。それなのに、少しだけ安心したような、落ち着いたような感じがした。

西脇はノートが一番後ろの白紙のページを出して、ペンを持った。

『真中』

そう書いて、あたしを見る。あたしは脱力した体を起こして覗き込む。

『たぶん』

またあたしを見る。

「なに」

その時の、西脇が何て書こうとしているか、あたしには二つの予想。一つは普通のこと。もう一つは、  
「やめて、もういい。お願い」

「カフェ・オ・レ でございます」

コト、コト、と薄いカップのカフェオレが置かれたテーブル。ノートと、『真中、たぶん』と、沈黙。

マスターは察して、黙って奥に引っ込んでいった。その靴音は、ホームへ続くのかもしれない。

「俺、」

穏やかな表情の西脇。

「やめて」

さつきからじつと、西脇を見つめている。あたしは、きっとこの人が、二つ目の予想を引き起こしそうで

「なんで」

「あたし」

怖い。無防備なあたしがどうやって西脇から身を守るかを考えたただけで。あたしは、酷いことを言う。もしかしたら殴るかもしれない。目の前の温かな飲み物を、ぶちまけるかもしれない。  
ごほっ、ごほっ。

咳き込むあたしに西脇が言ったのは

「好きかもしれない。」

予想は見事に的中した。痛い、この人、痛すぎる。

「だから」

悪魔がささやく。黄色とパールの渦巻き。胃空間へ逃げろ、脳が  
そう指令を出している。準備は少し足りなかったけど、多分間に合  
う。そういう指令。ドクドクと何か流れる。飲み込まれそう。倒れ  
そう。

「だから、やめてって言ったのに」

「でも、好きかもしれないし」

西脇。

完全にやられていた。あたしのほうが好きかもしれないじゃないか。

『好き』

そう書いて、西脇はページをちぎった。二つに折って、『西脇 恭  
平』と書く。それを見ていた。見ていたら泣けてきた。

「泣いてんの？」

こくこくうなずくと、西脇は困ったような、でも嬉しそうな顔を  
した。

喫茶ドルフィン。

私のお気に入り。

ねえ、父さん、ここには父さんはいなかったけど、でもあたしは  
良かったって思う。こんなにしよっぱい涙、久しぶりかもしれない。  
手紙らしきノートの切れはじを受け取って、カフェオレを飲んだ。

味は、まあまあ。

よく覚えてないとは言いたくはないから。

これは夢だ。

あたしは西脇と手をつないで、でもやっぱりうつむいてホームに立っている。

「真中」

うん、何？

西脇はあたしの手をぎゅっと握って、あたしはちょっと痛み、この感覚に酔っている。

「今日、どうすんの？」

え？

映画、と西脇は機嫌悪そうに言った。

なんか、面倒かも。

すっかりうつった口癖。違和感がない。

「やめる？」

うん、やめる。

「帰る？」

帰らない。帰らない。

「じゃあ、どうすんの？」

わかんない。電車きたら、とりあえず乗る。

「そうだけど」

西脇はいろんなことを話してくれた。

漫画が好きなこと。数学は父親にしごかれて嫌いだったこと。でも

今は好きなんだってこと。高校でたらとりあえずは大学に行って、サークルに入って、合コンの幹事とかするんだって。

「真中は？」

「あたしは、何でもいい。あたし、捕まるかもしれないし」

「は？なんで」

「人を、殺したから」

「は？」

ゴオーツと電車が入ってきた。

西脇が手の力を緩めた。その途端の悲しい気持ち。いつかは忘れそうなの、その悲しみ。そういう瞬間、あたしはやっぱり一人なんだって、強く感じる。あたしは逃げているのかもしれない。今、こうやって、西脇と語り合うことさえも。

「真中、おまえ男と付きあってんだって？」

ヤクザみたいにぞろぞろと群れて歩く女達の、殺気立った空気と、いい加減な言葉たち。

それが押川と仲間のもものだってことはすぐわかる。あたしの机を取り囲む。それが何を意味するか、それもあたしにはわかるけれど、これから何が起るのかははっきりとはわからない。心の準備は済んでいるけど、今日は体が持ちこたえるか保障はない。

「お前さあ、なんにもできないような顔して…なあ、こっちこいよ」「付き合って、ない」

その言葉は自然にできてすぎた。あたし自身、本当にそうだったか

もしねないと思うくらい。嘘をついて、後から後悔する気がしない。  
「嘘つくんじゃないやねえよ」

押川じゃない、誰かが凄んで言う。

「嘘、じゃない」

「てめえ」

あたしは、ほっとしていた。この瞬間を待っていたのかもしれない。  
嫌なことも、忘れたいことも、どうでもいいことも、幸福さえ、全  
部、通りいっぺん、全部流す。

これがあたしのやり方だった。そう、忘れるとこだった。手に入れ  
て悲しくなるくらいなら手に入らないほうがいい。離されるなら、  
最初から掴まれたくはない。

黄色とパープルのマール。今が、逃げる瞬間だ。

「真中？」

ぼこぼこに殴られて、教室の隅でうずくまっていたあたしの頭に、  
長くて細い、西脇の指が触れた。

「触らないで」

「大丈夫か？」

「さわらないで……」

西脇の指がすつと離れるのを感じる。ねえ、こんなに、こんなに嫌

だと思っている。嫌なことがふりかからないように、頑張っ  
てきたのに。こうなることは、全部わかってたはずなのに。

その時あたしを包んだのは、絶対に起こってはならないこと。

「真中、無理すんなよ」

西脇の手、胸、髪、指、制服の匂い、全部がぴったりあたしに張り  
付いて、包み込んでいる。すがりたくはないと思っていた胸が、離  
れたくても離れられないくらいに強くここにある。ねえ、どうして  
あたしの感情はこんなに、こんなに揺れているんだろう。

「西脇、あたし、怖い。」

カラカラの目であたしは遠くを見ている。西脇の体温だけ、かろ  
うじて感じている。

「大丈夫」

あなたを、失う自分が怖い。この、ポケットティッシュ一個。くだ  
らなくて小さな自分が、怖い。

あたしはまた、くだらない日常に戻ってきた。毎朝電車に揺られて、押川に行くわけば殴られて、逃げて、時々、父さんのことを思い出して。

真中 たぶん 好き

あの手紙は、制服の胸ポケット エンブレムの刺繍の裏 にしまつてある。これから先エンブレムをにぎりしめる時がきたら、あたしは西脇を思い出す。そんな気がする。

空間と空間を移動する。

勇気とか希望とか、そんなものはあてにならない。

信じられるのは、出来上がった未来。つまりは現実。それが受け入れられなければ逃げる。息をきらして。

つらいことまで掴むなら、あたしは何も掴まない。何も知らない、ままでいい。

間違った選択では、ないはずだから。

駅前北口。噴水から飛び散るひかりと水。

思い出すのはダルメシアンのドンのこと。死んだ時はほんとうに力  
チコチだったドンの体。

父さんは、ドライアイスでひんやりしていた。

誰にしてもらったかわからない、手にかけられた数珠は胡桃の殻で  
できていた。それもすっかり凍ったようになっていたっけ。それを  
触りながら、私は思い出していた。父さんの好きだった、吉田拓郎  
の歌。「旅の宿」。

それはたぶん、罪の歌だ。

またあたしは、ここに立っている。

ダルメシアンのドンも、諦めた父さんも、ここにいます。

そう思っただけ立っている。

醜い顔をしたあたし、醜い過去。

すべてから逃げる。

それが唯一できることで、提出課題。

こなせばギリギリでも生きていける。そんなことばかり考えている  
と、おかしくなりそう。

バスを待つために設けられたベンチに腰掛ける。

未来は、逃げるために用意されている。

父さんが陽炎でゆらゆらしている。

思わず腰を上げて、目を凝らす。

「まだまだ逃げる。いつか、意味くらいわかる」

そう聞こえたのは、幻聴だったのだろうか？

私はそっと、口の中でそれに答える。父さん、もう、意味は、わかったよ、と。

くつと顔をあげて、私は歩き出した。駅は、どこまでも続く道に似ている。

どこまでも逃げられる気がした。

終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9841b/>

---

逃亡

2010年10月10日16時22分発行